

反障害通信

創刊号

05.9.1

「反障害研究会」結成への呼びかけ

イギリス障害学が「障害とは社会が障害者と規定する人たちに作った障壁である」という規定を突き出してから、どのくらいの年月がたったのでしょうか？社会モデルと呼ばれるこの規定は、「障害者運動」を担っている人の中ではかなり浸透し、「わたしは社会モデルの立場にたつ」というひとはかなり出てきています。ですが、その中には、「障害者」という言い方に変えて「障害をもつ人」と言い方をしている人もいます。この「障害をもつ人」を従来の「障害者」という言葉で使うならば、これは明らかに社会モデルに対置している医療モデルでしかありません。

さらに、「障害」「障害者」という表記自体を変えようとする動きがこの混乱に拍車をかけています。「障碍—障碍者」「しょうがい—しょうがい者」「障がい—障がい者」「障害」—「障害」者「障害」—「障害者」まだまだ組み合わせが出てくるのでしょうか？まさに「人の数ほど表記や考え方がある」のでしょうか？

日本における障害ということのとらえ返しの転換は、「障害個性論」からはじまったのでしょうか？「障害は私の個性である」これは確かに差別への怒りを込めた開きなおりであり、「ここから新しい障害者運動が始まった」とも言いえる大きな意味を持っていたと思います。ただ、今日とらえ返すと、医療モデルの枠を超えていません。

国際的にはWHO(世界保健機構)の障害規定—ICIDH の①impairment(機能障害)②disability(能力障害)③handicap(社会的不利)という三層構造規定。これも、それなりに課題を提出して差別ということを問題にしていたましたが、医療モデルへの引きずられが指摘され、生みなおしが図られましたが、その後出てきたICIDH2—ICFは結局社会モデルへの転換に失敗したとしかいいようがない代物で、そもそもWHOというもともとが医療的機関で障害規定を練り直しても医療モデルから抜け出しえないのだという思いを持たせるものでしかありませんでした。

その間、その後、障害にかかわるいろんな研究会が立ち上げられ、議論もされているようですが、情報をわたしがきちんと入手できていないだけかもしれませんが、いまだに、障害規定をめぐる議論がきちんとなされていないし、議論自体も成立しがたい状況があります。

そういう中で、障害にかかわる施策は、医療モデルにどっぷりつかのまま進められ、それに対する批判も新しい障害概念からきちんとなしていく態勢が

できえていません。

今夏、「障害者自立支援法」制定ということの動きがまさにこのことを如実に表しています。その中で出されていた「応益負担」ということは一体なんなのでしょうか？ 社会モデルからする不利益のわずかなりの解消—軽減がなぜ「益」としてとらえられるのか、障壁—不利益の解消は社会モデルからすれば当然「社会の側」の責任のはずです。

今「障害者」は大きな岐路に位置しています。言葉の規定の問題から、その言葉の問題も含め、障害問題を根底的にとらえ返し、新たに出発を始めねばなりません。

この作業の困難さがあります。確かに知識や思考が必要なかもしれませんが。でも、むしろ困難さは、わたしたちが今のこの社会の固定観念にとらわれていることによることがあるのだといえます。知識がないから難しいのではなく、知識にとらわれているから難しいのです。その固定観念がこの社会の仕組みに根ざしているからこそその困難さともとらえられます。だから、その社会のしくみやそのことに絡み合っている世界観もふくめてのとらえ返しの作業が必要なのだと提起せざるをえません。

最近、本当に対話が成立しにくい状況があります。運動—抱えている、抱えさせられている問題の解決のための活動—の場面でも、ちゃんと議論もされないうまに、どこで何が決まったのかわからないまま「運動」が進んでいく状況があります。運動には相互批判が必要なのに、「私は批判されるのが嫌いだ」というようなひとが運動に参加してくる状況もあり、議論が成立しない状況に拍車がかかっています。一方で、ともすれば議論が何のための議論かあいまいになり、ただ自己主張をしたいだけの議論に陥っていく傾向も自省的に押さえておかねばなりません。

かつて「青い芝」は行動要綱の中で「わたしたちは強力な自己主張を行う」「わたしたちは問題解決の道を選ばない」と突き出しました。それは当時の被差別の状況の中でインパクトのある大きな意味を持った提起でしたが、もとより青い芝の活動がその行動綱領にとどまったわけでもなかったと思います。今日、被障害者の置かれている状況が大きく変わりつつあります。その中で、社会モデル的な意味での障害をなくしていく、「問題を解決していく」活動が必要になっています。その活動-運動は社会モデル的の立場にたった反障害運動と名づけられるのではと思います。

そのような運動に開いていくこととして、理論的な整理をしていく必要が迫られています。その中心課題は障害の医療モデルから社会モデルへの転換をなすことだと押さええます。そのような課題を持ったところでとりあえず研究会として、反障害研究会として出発したいと思っています。

みなさんの参加を切に願っています。